山川喜久男名誉教授著作目録抄

昭和二四年（一九四九年）
論文　「連結詞発達の二系列」『英文学研究』第二四巻第二号（日本英文学会賞授賞論文を整理修正したもの）

昭和二六年（一九五一年）
論文　「英語における分析的動詞形式の発生」『一橋論叢』第二五巻第一号

昭和二九年（一九五四年）
論文　「Predicatival Adjunct としての Participle」『岩崎民平教授還暦記念英語英米文学論集』研究社

昭和三〇年（一九五五年）
著書　『句と節』研究社（『英文法シリーズ』第二巻）

昭和三一年（一九五六年）
辞典編集『新簡約英和辞典』研究社（岩崎民平主監）

昭和三二年（一九五七年）
論文　「'every kind of book' と 'books of every kind'」*ANGLICA* 第二巻第五号
"The Two Constructions: 'Accusative and Participle' and 'Genitive and Gerund'," *The Annals of the Hitotsubashi Academy*, Vol. 8, No. 1.
「'that fool of a man' 及び類似表現について」『一橋論叢』第三八巻第六号

昭和三三年（一九五八年）
論文　"On the Construction 'Have (or Get)+Object +Past Participle'" *ANGLICA* 第三巻第三号
「"get+p. p." の受動形式」『英文法研究』第二巻第八号

昭和三四年（一九五九年）
翻訳　ヴァン・デル・ガーフ『通格付き動名詞構造の発達』研究社（『英語学ライブラリー』第四五巻）

論文　「副詞の機能と位置――様態の副詞を中心として――」『斎藤静教授還暦記念論文集』福井大学

昭和三五年（一九六〇年）

論文　「英語の不定詞に見られる主格的機能の発達」『人文科学自然科学研究』第二号

「Seem の語義と機能の変遷」*ANGLICA* 第四巻第二号

昭和三八年（一九六三年）

著書　『英語における準動詞の発達と特質』松柏社

『G・O・カーム』南雲堂〔『不死鳥英文法ライブラリー』第五巻、日下部徳次ほかと共著〕

昭和三九年（一九六四年）

著書　『O・イェスペルセン』南雲堂〔『不死鳥英文法ライブラリー』第一〇巻、石橋幸太郎ほかと共著〕

昭和四〇年（一九六五年）

論文　「迂言的 Go の略歴」『英文学研究』第四一巻第二号

「"Have＋目的格＋原形不定詞" の構造」『中島文雄教授還暦記念論文集』研究社

「英語学の展望と問題点――一史的統語論者の立場から――」『一橋論叢』第五四巻第三号

昭和四一年（一九六六年）

論文　"The Imperative Accompanied by the Second Personal Pronoun," *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 7, No. 1.

昭和四二年（一九六七年）

辞典編集『新英和中辞典』研究社〔岩崎民平・小稲義男ほかと共編〕

昭和四三年（一九六八年）

著書　『主題と陳述（下）』研究社〔『英語の語法・表現編』第八巻〕

翻訳　キルヒナー『動詞 Have の諸相』研究社〔『英語学ライブラリー』第六二巻、今野芳雄と共訳〕

昭和四四年（一九六九年）

論文　"The Development of *When* as Subordinate Conjunction or Relative Adverb," *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 10, No. 1.

「英語における "have＋to 不定詞" の発達」『一橋論叢』第六二巻第五号

昭和四五年（一九七〇年）

論文　「'Ethical Dative'——Shakespeare の用法を中心として——」『言語文化』第六号
"An Hungred' and Some Kindred Syntactic Archaisms," *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol.11, No. 1.

昭和四六年（一九七一年）
編集解説 Joseph Priestly, *The Rudiments of English Grammar & A Course of Lectures on the Theory of Language, and Universal Grammar* 南雲堂〔『英語文献翻刻シリーズ』第一四巻〕
論文　"OE *þær* and *hwǽr*——A Study of *Where* Developing in the Subordinating Function (I)——," *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 12, No. 1.

昭和四七年（一九七二年）
論文　「"*It is time* we *were* off." の構文——慣用的統語法の発達——」『一橋論叢』第六七巻第二号

昭和四八年（一九七三年）
論文　「史的言語研究と言語学の動向」『一橋論叢』第六九巻第一号
"ME *ther* and *wher*——A Study of *Where* Developing in the Subordinating Function (II)——," *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 14, No. 1.
辞典編集『現代英語学辞典』成美堂〔石橋幸太郎ほかと共編〕

昭和五一年（一九七六）
論文　「英語における目的語節構造と不定詞付き対格構造」『言語文化』第一三号

昭和五二年（一九七七年）
論文　「"as best I can"——その慣用法的特徴と歴史的発達——」『一橋論叢』第七七巻第五号

昭和五三年（一九七八年）
論文　「英語における分裂文の発達」『一橋論叢』第七八巻第四号

昭和五五年（一九八〇年）
論文　"The Adverbial Accusative of Duration and its Prepositional Equivalent. Part I. Old and Middle English," *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 21, No. 1.
辞典編集『新英和大辞典（第五版）』研究社〔小稲義男ほか共編〕

編集後記

本号は一橋大学名誉教授山川喜久男先生の停年退官記念号であり、実質的な編集は前編集委員の桜井雅人助教授が担当した。（福居）

山川先生が専門とされてきた英語学は、近ごろではイングリッシュ・リングウィスティックスと称することが多くなってきたようだが、先生は「私の専攻はイングリッシュ・フィロロジーです」と言われる。その大きな理由は、英語の統語法等を主に史的観点から実証的に考察するという研究の対象と方法に基づくのであろうが、あえて推測させていただくならば、「ことばへの愛」としての言語研究という研究態度の問題でもあろう。この態度は、現代英語を扱われるときにもリングウィスティックスに言及されるときにも感じないわけにはいかない。

この道に進まれた当時を先生は次のように回想される。

私の場合、中学は地方の商業学校であったが、人格的に立派な英語の先生に恵まれ、早くから英語が一番得意な学科となった。三年生のとき、この先生が「君が上級学校に進んで専門に英語を勉強しようというなら、語学校に、市河三喜先生の高弟で、岩崎民平先生という、語学の面でも文学の面でもすぐれた先生がおられる。語学校を目指して勉強するがよい」と言ってくださった。東北の商業学校から東京外語の英語部にはいるということは大変のことであったが、私は先生の言葉に大いに力を得て、いっそう英語の勉強に励み、英語の研究に興味をもつようになった。

この興味はその後に多くの業績として結実し、それぞれが学界において高く評価されている。山川先生のフィロロジーは文献学と言うよりは良き伝統を受け継いでいる言語研究であり、この「ことばへの愛」はすべての著作に一貫して流れている。また、文章そのものも端正で折り目正しく、先生の人柄がよく表われていることは、多くの方々の指摘されるとおりであろう。

一橋大学で三十年余にわたって英語および英語学・英語科教育法等を担当され、また語学研究室室長や語学ラボラトリー運営委員長を歴任された。語学教育および語学研究の振興に努められ、また新学部の問題にも熱心に取り組んでこられた様子を拝察すると、その根幹にはやはり「ことば」に対する並々ならぬ愛情を感じるのである。

＊　＊

年譜・目録については、文字通り略歴であり著作目録抄であることをお断りさせていただきたい。たとえば、著作に関して言うと、この他にも一般雑誌等への寄稿論文や書評・注釈および分担で執筆された辞書や研究書など、かなりの数にのぼるが、すべて割愛させていただいた。

この記念号は英語担当教官によって計画されたもので、特に編集執筆に御協力下さった方々にお礼申し上げます。（桜井）